

館山海軍航空隊と赤山地下壕の建設から占領軍上陸へ

高橋博夫（館山市沼在住、元館山市教育長）

聞き手:愛沢伸雄(NPO法人安房文化遺産フォーラム代表)

愛沢: 館山は1945年9月3日にアメリカ占領軍の本隊である第8軍第11軍団112騎兵連隊戦闘団が上陸した地であり、日本の歴史にとっても、あるいは世界史上でも非常に重要な出来事がありました。

その出来事があまり知られていない上に、「そんなの横須賀や横浜の話だろう」ということで長い間、見過ごされてきました。この地で証言する方があまりいないなか、当時の米占領軍のカメラマンが撮影した16ミリ記録映画が近年、公開され、私はVTRになった映像を通じて、館山での占領軍上陸とその後の様子を知ることになりました。

7、8年前から市民に呼びかけ、上陸した9月3日前後に記録されたVTRを鑑賞する会を開催して、当時の証言を求めてきたところです。その際に自分が映っているとの証言者も現れました。今日の証言者高橋博夫先生からも、その際、ご自宅のことと館山海軍航空隊の建設地をめぐるのお話を伺っていました。最近、そのお話と米占領軍の上陸などについて、極めて重要な歴史的事実の証言をお聞きしました。

「戦後70年」の節目の年にあたり、実際に見聞した高橋博夫先生の体験を語っていただき、当時の歴史的な事実を語り継いでいきたいと思っています。今回の戦跡全国大会では高橋先生自らが貴重な体験の語り部になります。高橋博夫先生は、小学校の教員でしたが、後に校長というだけでなく館山市の教育長という要職に就かれた方です。この地域において、文化財の保護に大変尽力された教育者として、なかでも歴史・文化を活かしたまちづくりの理解者でもあります。お住まいがかつて豊津村という場所であり、今日海辺のまち・館山市が生まれたところでもあり、館山海軍航空隊の航空基地がつけられたところです。「戦後70年」を契機として、私は多くの方々に館山の世界史的な出来事を伝えていきたいと思っています。

高橋: 本には占領軍の先遣隊上陸が31日と記載されていたが、30日に緑色のパンツ、腰に拳銃、裸で岸壁を上がったのを見たのです。その上陸してきた兵士の姿にまず驚きました。戦争が終わって、揉めている最中に米軍は、裸にパン

ツ姿で上がって来ることが信じられなかったです。富津岬に上陸した時の写真がありますが、館山に上陸した時も同じような姿であったのです。航空隊ができることからこの8月末までの過程を一つの繋がりの中で、私なりに調べてみました。実は館山航空隊がつけられていくなかで、赤山の存在もあり、そこに地下壕もつけられ、その後戦争遺跡として市の史跡になっています。

そこで館山という地域にアメリカ占領軍が上陸するという出来事が起きるまで、つまり館山の街や館山海軍航空隊、そしてその付属の赤山地下壕跡などが誕生してきた一端を紹介し、その基盤のうえに館山市が成立してきたことを私なりに少しお話をしたいと思います。

「房州 鏡ヶ浦」絵葉書



ここには柏崎浦と書いてあります。昔、海岸線に沿って大賀、笠名、宮城、柏崎浦、沼、上須賀、それから新井浦、真倉というように分かれておりました。海岸線のなかで割合に大きかったのが柏崎浦という海岸で、その先にあるのが新井浦で、当時は真倉が旧館山で一番大きな集落で、高が一番多く、次に沼の集落でした。柏崎浦の海岸は便が良かったということ、私の家がちょっとこっちに今あります。



これは寺山、いわゆる赤山から眺めて、というよりもむしろ豊津公園のところから眺めた写真です。ここに浮かぶのが「高ノ島」という島です。その先の島は「沖ノ島」と呼ばれています。

昔、この辺は水産基地と言われ、館山湾には日本水産界の先導者関沢明清がいて、北は北海道、南は小笠原諸島方面太平洋に向かっての遠洋漁業、それから高ノ島には水産試験場があり、水産の先進地でした。

ところが、大正12年の関東大震災で全部潰れてしまう。多くは茅葺屋根でしたから潰れたのです。ここはずっと海岸線であったところが、関東大震災で1～2mぐらいは隆起し、この辺は浅い海でしたので、盛り上がってつながってしまいました。



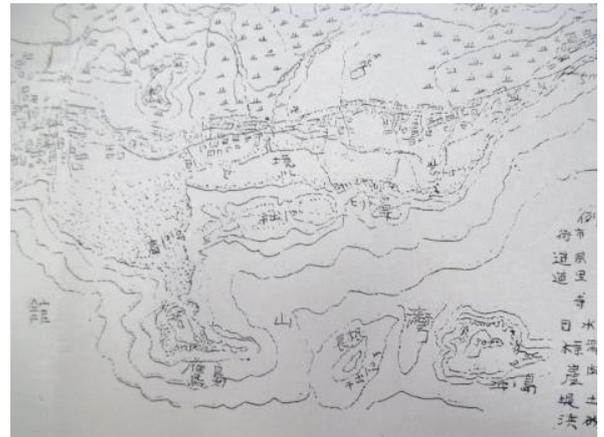
これが航空基地を作るようになった原因にもなったわけです。でも、航空隊が出来るのには理由がありました。大正9年の第41回帝国議会で5つの海軍航空隊をつくる決議したものの、館山に海軍航空隊が出来たのは昭和5年でした。他の4つは早くできたが、そこまでの期間に館山だけができませんでした。

柏崎浦でも、私が住んでいるのは西原地区、隣の宮城では海苔養殖をやってお金を稼いでいました。館山っていうのは砂地のところでは海苔養殖をして、これが岩場だった、だから磯崎とも言われるわけです。これがいくつかあった。だから、私の家のここから柏崎、その隣は沼、ここは磯崎といわれ、住所も字磯崎となっています。いかに磯が沢山あったかということですね。それで、海岸線まで山が迫り、道路をみると海岸に沿って出来ているわけです。

そして、その次の時代の道路は、私の家のすぐ脇にあり、今もこの道路は赤山がまだ削られる

前に、沼の人たちが海岸に出るために通っていました。要するに、かつての小さな道路は残っています。その一つがプールのところのすぐ脇にあり、今は駐車場になっているところの小道です。そこから赤山の山を越えて行くというと、右手の方角には洲崎海軍航空隊の眺めがよい場所にできます。写真の地図は沖ノ島の状態がわかります。昔のものは距離感がわかりませんが、俯瞰図的に書かれ、地形的にはどうかはわかります。

愛沢：この地図のなかには頼忠寺山と記載されていたところが、「赤山」と記載されていることがわかります。山の呼称が変わったということでしょうか。



高橋：ここが境川ってなっているでしょう。こちらは「赤山」です。私たちは「頼忠寺山」ですから、昔からお寺の山なので「寺山」と呼んでいました。それから今は「赤山」に変わっています。でも、いつこれが「赤山」になったかのかがはっきりしません。昔の書物に「赤山」と書かれたものがあるという人もいます。なかには後からの説明だと思えますけど、「城山（白山）」があるから、埋立ての際の山立てのために、こちらが「赤山」といったという説もあります。でも今はただそういう説があるということ以外、皆さんが「頼忠寺山」とはいいませんので、これは「赤山」というしかないですね。

愛沢：館山町が昭和2、3年ぐらいから5年ごろに発行したガリ版刷の『館山町誌』があり、実は私自身、館山海軍航空隊がどのようにつくられていったかの概要を知ることができました。どうも記載の一部が違っているのではないかと思います。当時の地形をみると、航空隊の埋め立てをするときの土は、赤山の裏とか、あるいは洲ノ崎航空隊の南側にある山を削って運んだといわれているが、実は違うのではないかと思います。

『町誌』では大林組が埋立てをしたとあり、これまで「赤山」の南側を削った土砂で埋立てという話もありました。これは「赤山」にいつ地下壕

が作られたかにも関わっていることですが、高橋さんのお話では、ほとんど「赤山」の土砂は使われていないということです。

実際に大蔵大臣の方から埋立て予算が昭和3、4、5年で埋立て工事がおこなわれるが、サウンドポンプを使用した浚渫の土砂を使っていると思われる。5年からは航空基地内の施設設備工事が始まっています。その際に高ノ島の弁財天のことが重要でした。

高橋: 入ってすぐのところには造船所あって、すぐ左にその頃の建物の一部が今も残っていますが、水産講習所の実習場であり、その下の海岸には岩が掘られイクスみたいなものが残っています。



愛沢: これが今回見つけた当時の地図です。これは高ノ島に予定した航空基地の配置略図で、この場所は航空基地のなかでも水上班といい、水上飛行機を配備する基地施設を計画していました。今日も格納施設があった場所や滑走台跡などは現在、極洋船舶や自衛隊、海上技術学校が使っています。

高橋: 結局、この辺が少し削られて道路を拡張し、航空基地が出来る時に、さらに我が家もちょうど基地予定地にかかってしまい、買収という状況になったわけです。ここには先ほどあった青山学院水泳合宿所ができたということは、航空隊の開設よりは先にできています。



ここは旧豊津村の小学校の跡地で、それを青山学院が土地を買って、水泳合宿所になった。航空隊がなかった時には、ここからすぐ100mぐらい下がって行くと海岸線で、砂浜だったので海

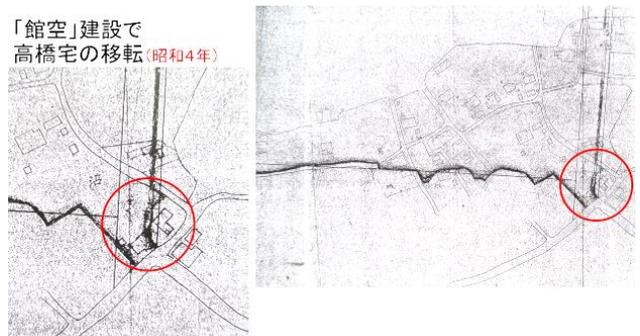
水浴場として良かったということです。

さて、昭和3年から航空基地の工事がはじまり、「寺山」（「赤山」）ところまで、つまり今の道路のところまで迫っています。道路拡張をする際には、一部、航空隊の土砂も足りないというので削っているようです。私が考えるには、今も航空隊裏側の大部分は、つまり南側にある段差になった部分は全て削られた場所ということです。そうすると削ったものはすべて基地の埋立ての土砂に使われたといえます。

今の滑走路のところは、大林組がサウンドポンプを使って海の土砂を入れているわけです。その前に、伊豆の方から岩壁の岩石を持って来て埋立て場所を全部囲ったと言われています。3年から工事が始まって、宮城地区には家屋が多くありました。

これから下の部分は、出っ張りになって岩の関係じゃないかと思えます。ここから買い上げて埋め立てを始め、ここから高ノ島から真っ直ぐ沖ノ島の方に行って、それを斜めにこちらへ入って来て、ここに川があります。宮城のところから入って行って、昔あれは菱川（ひしがわ）といていた時代もあります。これは富士山を眺めて行くのに鏡ヶ浦にちょうど菱形の影が映るということで、昔は「菱浦湾」と呼んでいた時代があります。菱川には豊津橋が架かり、その川に沿って航空隊が作られています。今の海洋技術学校のところを真っ直ぐ北にいくと川にぶつかります。その川は沖ノ島のすぐのところまで流れていったのです。航空隊はこの川に沿って、これを買い上げ、海岸線の方は真っ直ぐにできております。ですから、川を境界にしていることがわかります。

この土地を購入して、昭和3年頃はこちらからやったようです。私の家は館山市沼1016番地という住所で、地図のなかでは我が家はここにありました。結局、この土地を提供しなければならなくなり、この部分と我が家までが航空隊建設のために「第1次疎開」となりました。

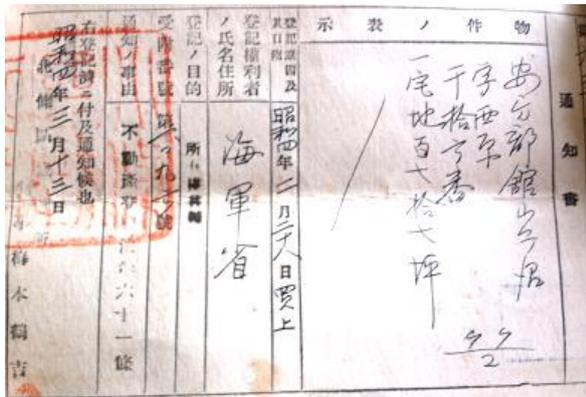


この疎開では、我が家はこちらの方に移りました。今度は航空隊の敷地を建設するために、こ

こを全部削ったのです。石垣みたいな砂岩で山になり、今でも古い兵舎は壊されましたが、その裏側のところを見ると真っ直ぐに削られています。ですから上から下まで計ってみると、その土砂の量は相当あり、航空隊を建設するため全部下の方へと運んで埋め立てに使ったといえます。とくに建物の下は砂地ですから、基礎のために土砂を下の方へと入れ、さらに重要である滑走路には削った土砂をどんどん入れ、それを上からコンクリートで固めたのではないのでしょうか。

その証拠をみると、古い通りは波打ち際にあり、磯がこのようにあります。私の集落西原地域は航空隊ができる前、地図のようになっていましたが、最初にこの部分が買い取られたのです。建物が道路にかかっているからということで、買い上げられて、今の航空隊へ下がって行く坂道も含めて、こちらの地域全体が「第1次疎開」であったと知っていただきたいと思います。

私の家は昭和4年に館山市沼966番地に移動させられましたが、「赤山」に上がる場所の十字路があります。そこを上の方へ行くと、右側のプールのところに入って、今の駐車場があります。その十字路をこちらへと北側の2軒目が、我が家が昭和4年に引越しました。



我が家があった証拠物件である書類が残っています。我が家があった跡の道路です。ここが西岬方面に行く道、これが航空隊へに行く道、こっちが館山の方へと帰って行く、赤山の方に来る道の、この交差点のこのところに我が家があった。その後ろは畑で、その下に4軒家があり、そこも「第1次疎開」させられ場所です。

道の角のところにも石ころみたいなものがありますが、これが我が家の井戸だった跡です。埋めてこのような形になっていますが、井戸があったので、私は歩くたびに「おお、これが我が祖先がいたところだな。寛永年間からずっと育ってたんだなあ」というような気持ちです。いつもこの通りを車で走りながら「俺の家の跡かあ、威張って通っていいな」と思っています。

一同：(笑)

高橋：これが「第1次疎開」でした、そして航空隊の建設がはじまったのが、昭和4年2月28日に、我が家の土地を海軍省に売却し、その書類は我が家にあり、「貴重な資料だよ」「じゃあ」ということで、今日の証言の会にも繋がっています。金銭が書いてありますが、もっと調べると大蔵省に売買の書類があり、完全に証明できています。

愛沢：名前は書いていませんが、赤い囲みのところが高橋宅の土地売買の証明です。

高橋：番地が書いてありますが、我が家は今の自宅へと疎開をしたとのことで埋立て作業をおこなうことになったのです。崖の下にも住宅が何軒もあり、漁業関係者が多かったので、そのような家庭から、次々に疎開をしていきました。こちらの土砂を入れる、こっちの土砂も入れると両方から攻めて土地を削って、航空隊が作られていきました。

沖ノ島と高ノ島を結んだところの岸壁の下には石が積まれています。これは昭和3年あたりの時からこのように石を積んで岸壁をつくって、海水がまだあるが浅瀬になっている場所の土砂をサンドポンプで吸い上げて、埋立ての土砂にしていったのです。ここは内湾で下に岩が入っていませんが、沖ノ島の方へ行くと石が積んであり、波で崩れるといけないので、たくさんの石が入っているのがわかります。昭和5年の時はそのような状態だろうと思います。

愛沢：大事なことは、海軍の航空基地をつくるとともに、軍港をつくるために、浅いと軍艦が着きません。結局、サンドポンプで吸い上げ浚渫しながら、赤山の裏手の土砂も使ったかもしれないが、多くは軍港にする部分を相当吸い上げて、周りは伊豆石とか先ほどの岩石をつかって岸壁にしていったと考えられます。

高橋：埋立ての土砂について、証明したいことがあります。昭和5年頃は、航空隊とはいっても綺麗に出来ている訳ではないので、滑走路が上手くできたとはいえ、砂だらけで芝などは生えない状態でした。塩分が含む海砂は、芝も植えようがないし、塩を抜いていくには時間がかかったでしょう。



館山海軍航空隊の基地は、東西に真っ直ぐに滑走路が出来ていて、航空母艦の形のように見えます。海に面したところある滑走路は、周りが砂になったところでタッチ&ゴーの訓練を考えていたのか、他の航空基地とは違った滑走路のように見えます。この航空隊では、水上用の飛行艇部隊と陸上用の航空部隊の2つの部隊が同時に開隊していることも一つの特色ではないかと思えます。とくにタッチ&ゴーが東西を使って出来る形になっているのも特徴かと思えます。

それと基地内が塩分の多い砂地のことはいいましたが、その証明は戦後に食糧難で航空隊の近所の人びとは基地内を農地として開墾したのです。このことは洲ノ空でも開墾され、すぐに作物ができました。館山の基地では、広いところをたくさん使えると期待して種を播きました。ところが芽が生えてこない、芽が出ても潮風でやられてしまうということがおきました。地面が砂で塩を含んでいるから栽培が出来なかった訳です。サンドポンプを入れてつくった砂地の航空基地ということであったからです。



愛沢：私もこの話は航空基地の建設にあたっての新しい発見でした。

高橋：今度は「第2次疎開」になります。残っていた人たちのうち第2次は、地図の部分の人たちには、この次に「赤山」を掘るということに関わってきます。赤山を掘った土砂を捨てる場所が必要となります。残土処理ということで、館山から西岬に向かっていく道路の中で、一番近くて良いところはどこかと言えば、直接、航空隊の方はバスが通れませんが、一番近いところとなると、昔の小さい道があったところで、傾斜があって、我が家からすぐのところへ、下へと向かって行く道は都合がよいとなりました。

まず、最初に道路面にあたる2軒の家屋を疎開させました。それは洋服屋と足袋屋で、ともに平田さんというお宅ですが、まずに動かされたのです。現在、駐車場に向かう方を削って、この下が赤山地下壕になっていく訳ですが、これらは繋がって道路になりました。初めは爆薬など

かけられないので、ツルハシでやっていました。

その道路より下の方は、両方から土留めのために積み石にし、航空隊で使ったと同じような積み石にして。道の勾配は波の関係があり浜の方はなだらかですが、崖になったところは急斜面になっています。最初に削られた土砂を使って道路を作り、道路ができると今度は、下にあった家屋を強制的に疎開させたのです。

今度は「第2次疎開」になったわけで、真っ直ぐ海岸に向かって、最初に出来た第1次の埋立てから第2次では、それから先を東の方に向かって、一気に土砂を捨てていったのです。それは大変な量の土砂であったので、西原地区の「第2次疎開」になっていきました。結果的に現在のよう埋立地が成立し、かなり先の西の浜という海岸まで繋がっていきました。西の浜に堤防が海上に突き出た船着き場があります。土砂が足りない場合は、隣の北下台から運んで埋立てしたといえます。こうして海岸の道路が戦後、つくられる基礎になりました。

水源地の問題では、人が住むために飲料水がなければなりません。航空隊などの裏などは、水脈があって掘れば水はたくさん出ました。私の家にも岩盤のところに井戸があり、今でも道のすぐ下のところに大井戸がまだ残っているかもしれない。掘ればすぐ水が出てきて、我が家も岩盤のもとで水が豊富でした。

航空隊も掘れば出たと思いますが、人数が多いので宮城の山のなかに水源地を求め、そこに航空隊専用の貯水地を作って、道路に沿って赤山の下を通して航空隊へ水と引いてきたのです。

現在は、館山水道と宮城水道はドッキングしており、両方で使用できるように出来ています。昔は水源地に鉄条網が張られ、なかに入られませんでした。今でも当時の水源地への道路を使っています。



愛沢：この地図にはまだ「赤山」との記載がなく、「頼忠寺山」となっています。高橋先生は「寺山」といっているように、「赤山」という言い方であれば、「頼忠寺山」と書かれたことを知ってい

たければ、「赤山」という名前がこの時期を境に名付けられたことがわかります。

高橋：山の土地が頼忠寺の所有なので、今でも土地の一部が関わり、赤山地下壕跡が通り抜け出来ない土地問題が起きてきます。

愛沢：航空隊が拡張して、所有地がドンドン増えていることがわかります。

高橋：戦争が激しくなって「第3次疎開」がおこなわれました。昭和19年から20年になると空襲が激しくなって、航空隊近辺の家屋が疎開とともに、市内にあっても間引き疎開がおこなわれるようになりました。西原地区にいた航空隊近辺の住民たちは、「第3次疎開」をおこなったのです。沖縄戦から本土での決戦が叫ばれているなかで、今度は館山航空隊に米軍が上陸してくるとされました。

道路を挟んで最初の家は、航空隊の古い正門よりも先に10mか20mぐらいちよつと坂になって、その先は通行できなかったのですが、第2次の疎開では道路で繋がって、軍需部ができて、物資の備蓄や飛行機の修理がおこなわれていました。水上機のところにはカタパルトがあり、また水上機の格納庫で、引き上げるためワイヤーで揚げる装置や釣って揚げるクレーンなどがあり、今残っている倉庫は軍需部の建物でした。

「赤山」に向かって真っ直ぐ上がっていくと、宮城の道の西側の方は航空隊関係の地下壕や用水用の貯水池となり、山に上がって左側には数多くの地下壕があり、軍需部が飛行機の修理部品や材料の管理・保管をしていました。また格納庫や倉庫、工作機械が置いてある機械工場などがありました。

愛沢：これは当時のものですね。

高橋：航空隊が昭和5年に開隊した当時の塀、その塀の頭飾りですが、今も残っています。

館山海軍航空隊



愛沢：赤城の艦長が航空隊の司令になっていますが、実戦部隊が空母に乗り組んで機動部隊をつくっていく時に、航空隊の司令がそのまま艦長となって、要するに同じ釜の飯を食った部隊をバラバラにしないで、セットで空母に乗せてい

た時期があります。

高橋：ですから、航空母艦のパイロット養成のためか、タッチ&ゴーをよくやりました。滑走路も綺麗になっていったように思います。

愛沢：昭和18年頃に作成された「館空」「洲ノ空」施設設備を設置の軍極秘の設計図があります。これには「赤山地下壕」内部の施設の一部がわかります。たった1枚しかないので、「赤山」の地下壕や頂上部が航空隊の施設としてどうだったのでしょうか。赤山の頂上部にはこのような施設があったようです。



高橋：「第3次疎開」の後に、実は「第4次疎開」もありました。4次の疎開は、米占領軍の上陸によって占領地が決定されたことです。占領地内に住んでいる者は、8月27日の疎開通知を受けて翌28日から29日のうちに、すぐ退去せよと。アメリカ占領軍の先遣隊が館山に上陸すると、命令は最初8月28日ということでした。マッカーサー司令部からの通知は26、27日頃に来ていますが、占領地の中に住民がいてはいけないというわけで、「第4次疎開」となったのです。それまで2、3日しかないが、すぐ疎開となったのです。館山の場合にはまだ疎開する場所があったから良かったのです。皆は市内の親戚に行くなど、まさに着の身着のまま動いたのです。それが占領から5か月間ほど続いたと思います。

愛沢：その疎開した家屋はどこでしょうか。

高橋：この道路から航空隊の方の住民で、向こう側は「洲ノ空」のところからでした。なかに住んでいた人たちは皆な、強制的に疎開させられ、その占領地は日本人が住めなかったのが、第4次でした。私の地域は疎開が4回になった住民がいたのです。「第4次疎開」まで、館山航空隊とは縁があったということです。

愛沢：基地内の芋畑の話です。短い期間ですが、開墾組合が耕作したということですか。

高橋：開墾組合を作って、北条地区からも来て開墾していました。なぜかというところ終戦直後、食物があまり無く、芋畑を必死で耕作したのです。

愛沢：ところで館山海軍航空隊がどのような位置付けかということでは、「昭和8年」「海軍要塞」

と刻字した標柱を見つけた時には驚きました。



この標柱が赤山地下壕の近くに存在していたことに注目しました。明治期からある「東京湾要塞」の標柱に「海軍省」と刻字されたものもありますが、「昭和8年」の標柱設置の意味は、日中戦争が激化して館山海軍航空隊の役割が高まった時です。「東京湾要塞」地帯にあって、館山航空隊や赤山地下壕があった場所が、あらためて「海軍要塞」としたことにはどんな意味があったのでしょうか。館山航空隊が航空基地でのモデル的な通信基地であったことと関係しており、特別な役割をもっていたように推測されます。

このような資料があります。昭和14年の段階で「赤山」の頂上部に「見張り員兼機銃員」の兵員配置がおこなわれています。多分、この段階では「赤山」には行けなかったと思います。高橋先生はその時何歳でしたか。

高橋：12歳かな。

愛沢：その時期に「赤山」に地下壕が掘られたかどうかわかりませんが、「赤山」と館山航空隊のそばには塀がつくれます。今もその痕跡であるコンクリート製の杭があります。

高橋：当時、航空隊の周りには全部、高いトタンの塀によって囲んでしまい、敷地内部が見えないようにしていました。西原区を歩くと上の道路まで、狭いところに杭あり、今でも塀に使われている場所もあります。「第2次疎開」のときに、

このようなトタン塀が作られ、海岸につながっていく道路には、すべてトタン塀が張られ隔離されました。

当時、「赤山」の周辺がどうであったかというと、このように道路があって、その道路を使って土砂を運び出しました。初めの頃は人力でやっていましたが、そのうちにトロッコという四輪台車を使い始めました。道路とはいっても、砂利道に軽便鉄道用のレールを敷いた道路で土砂を海岸の埋立地まで運んだのです。

台車には動く箱が載っていて、土砂を入れる4面の板張りの箱が台車にセットされています。そこにドットと土砂を入れて、動かないように固定する抑えが付いています。土砂を詰めてトロッコを押して道路を下り捨てる。土砂が捨てる場所が段々と遠くなっていきます。遠くなると、今度は帰りレールの軌道が一本しかないから、皆で「ヨイショ、ヨイショ」と上へ上へとあげていくわけです。その時に道路に傾斜があって大変でした。

初めのうちは人間がやっていたわけですが、4台、5台、6台を後ろにしていると、それぞれのトロッコにブレーキ係がいるわけで、台車に丸太を付けてブレーキ装置にします。丸太でブレーキ代用にするためには、自分の全体重をかけて煙を出しながら止める必要があります。ブレーキ役は土砂を積んだトロッコがとても重いですから、ゆっくり動かさなくてはならない。真っ直ぐの時はいいのですが、勢いついて曲がった時には横転してしまいます。初めは人力でそのような作業をしたので、怪我した人も多かったです。そのうちに土砂の量が多くなり、回数も増えたということで、軽機関車、小さいディーゼル機関車みたいもので引っ張るようになり、非常に能率的になった。能率的になったのは良いが仕事量が多くなると、道路の交通止めをしなければならなくなり、交通止めをする係り、踏切番のおばさんが立つことになったのです。

今も赤山地下壕を掘削した土砂運搬に関わる残骸が残っています。これが踏切の第一歩となり、おばさんたちがこの仕事をするために、毎朝、



赤山地下壕建設の土砂(ズリ)を運ぶトロッコ軌道の踏切跡(大黒屋前)



トロッコ軌道が敷設される



レールの上でトロッコの車が滑らないように砂を撒いていました。その仕事が終わると次には、所々に油を撒いていました。おばさんが2人いて、その人たちが朝の仕事をする。おじさんたちはいろいろな仕事があって、台車を組んでトロッコを作ったりしていました。小さい頃は、家のすぐ脇にレールや台車の置き場があり、そこが唯一の遊び場でした。危ないで怒られました。でも結局は、いたずらしては家作ったりして遊んでいました。赤山地下壕建設は、トロッコ作業が早くから行われて、昭和16年のハワイ真珠湾攻撃の開戦前からであったと思います。

愛沢：多分、高橋先生のトロッコ作業は、赤山の真ん中にある巨大な燃料タンク基地で大きな穴があり、人力のトロッコだけではなく、その後は軽便鉄道の機関車を使っていたということで、大規模な作業によって、赤山地下壕の施設づくりがおこなわれたということであったとわかりました。

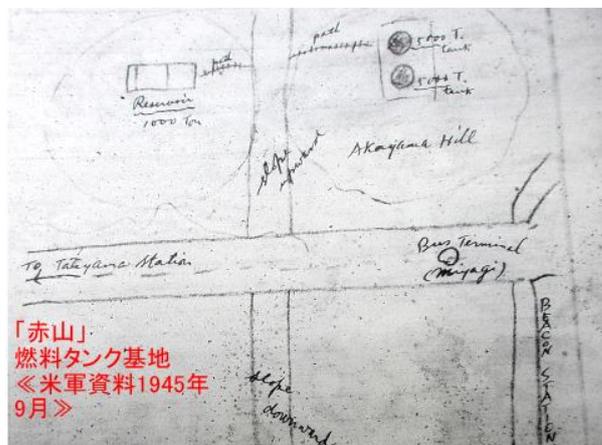
高橋：それでいつ頃から作業が始まったかも、先ほどもいいましたが昭和15年あたりではないかと、それからもう一つ、その後働いていたのは日本人のだけではなく、朝鮮の方々も多くいたということです。戦後、館山に残った家族では、今も住んでいる方々がいます。

そこで、掘削の方法ですが、最初はツルハシでやっていたのですが、その次はダイナマイトで少しずつ砕いていったのです。爆破させる時は、サイレンを鳴らし、また笛が吹いて安全を確認してから爆破させていました。それと細かいところはツルハシでやる。とくに地下壕の方の掘削は大体ツルハシだったと思います。ツルハシはすぐに刃が弱くなるので、すぐ脇には掘り立て小屋をつくって鍛冶屋がいました。鍛冶屋が鞆(ふいご)で風を送って火力を高め、鉄を赤く熱して刃先を叩いていたのを見ていました。

さまざまな職業の人たちが赤山の作業に徴用されていましたが、陸軍の兵士たちが駐屯(倉本部隊)してきました。その部隊が来ていた頃は、銃とか剣もなく年配の招集兵で、赤山を掘削する労働者でした。残ったところを手伝っていた

と思われ、我が家に兵士たちが来ていました。西の浜には赤山を掘削している会社の非常に体格のいい組頭がいて、もう亡くなりました。

愛沢：米軍が上陸して、最初に調査した場所が「赤山地下壕」だったと推測しています。これはアメリカの資料から見つけた唯一の「赤山」を調査したもので、右側には大きな燃料タンクが二つ描かれています。要するに上陸してからの「赤山」を調べたことがわかります。



今のところ「赤山」に関する資料は2つしかありませんが、最近、アメリカから入手した占領軍資料には「完全な地下海軍航空司令部が館山海軍航空基地で発見され、そこには完全な信号、電源、他の様々の装備が含まれていた」との記載がありました。

高橋：豊津ホールがありますが、かつてここには青山学院の水泳合宿所がありました。昔は海に行くのにはここからでした。うちの脇には細い道があり、海岸に続いていました。多分、最初はこの道を歩いて海水浴場に行っていました。もう一つはこっちの宮城の方から行ったのですが、崖が多くてちょっと遠回りしたと思います。最初は航空隊がなかったわけですから、どうもこちらの道を使って海岸に行ったと思います。

佐藤隆一(青山学院高等部教諭)：埋め立てたところが最も海水浴には適していたのですね。

高橋：適していました。ですから、岩場のようなところと砂浜があるところが繋がっている宮城地区を通っていたと思います。でも、ここに航空基地がつくられ、通れなくなったわけです。青山学院には、土地を買ってということまでいったようですね。

佐藤：はい。

高橋：航空隊に買い上げてくれないかといった時には、いらぬといわれたようですね。

佐藤：はい。

高橋：ところが海軍から有無をいわず買取したいといってきたのは昭和16年9月ですか。

佐藤：そうです。

高橋：それで青山学院がその期間だけ、あそこにあったということになるわけですね。海岸に行くには、我が家の脇の道を下りて行きました。

愛沢：米占領軍は、戦争末期に関東侵攻計画で「コロネット作戦」をつくった際の作戦地図をみると、なぜかコンパスの中心に館山が置かれています。結局、急に日本がポツダム宣言を受託するということになり、それまで占領政策は米軍によって「ブラックリスト」作戦という名前で、3年ぐらい前から改正しながら、占領政策が検討されてきたようです。ポツダム宣言受託から行政の面のあり方や、軍によるブラックリスト作戦、つまり軍政の面での大きな揺れ動きが短い時間のなかで起きたのではないかと思います。

ここで重要なのが 28 から 30 日の間に、日本の占領政策をどうするか結節点になっているのではないかと考えられます。

マッカーサーは 19 日にマニラで河辺虎四郎という日本の使節団と会って、一応 28 日にマッカーサーが日本に来て、31 日には降伏文書調印という日程にしたものの、台風が来たことで、2 日間延期され対応が変更になったということです。

これはマッカーサー司令部からの上陸指令の電報です。ポツダム宣言を受託した後に、日本の大本営はクーデター未遂事件もあり、その対応に追われていただけでなく、マッカーサー司令部からもいろいろな命令が来て、当然、対応が混乱したはずですよ。

一方、米軍側も、ブラックリスト作戦を改訂する時間がなくて「直接軍政」という面での対応を検討していた中で、短時間での対応により、一部混乱して軍政のあり方では揺れ動いたと思われる。だが結果的に、海兵隊による先遣隊での動きとともに、第 8 軍本隊のなかでもカニンガムを占領の総括指揮官とした第 112 騎兵（機動）連隊戦闘団という精鋭部隊を送り込んで、ブラックリスト作戦が館山で実施されたのではないのでしょうか。

30 日からの先遣隊では、海兵隊が館山と富津、そして横須賀に上陸し、機雷掃海部隊ともに本隊が上陸する際の軍事的な危険を排除していました。海兵隊が富津に上陸する写真は新聞など



で報道され、その後の機雷掃海部隊の写真もあります。

一応、連合軍ですから、占領軍っていうのは米軍だけのイメージがありますが、要するに米英軍とっていますし、この鉄兜は英軍兵士のようです。それで、先ほどのこれが非常に問題になるわけですね。

高橋：これが問題になるわけです。米軍の司令部があったマニラに行った使節団の河辺虎四郎団長のエピソードがあります。米軍は予定された日程によって、ミズーリ号での降伏調印もすぐ実施するとのことでしたが、河辺は、すぐには駄目だ、出来ないので 10 日間の猶予をほしいと交渉し、最後には認めてもらったようです。「あなたがたも占領する人だけでも、了解してもらってありがとうございます。その通りやります」となったとのことですよ。

そして、占領のために先遣隊が来たのですが、まず上陸したのは富津岬や横須賀、そして館山でした。実際に 8 月 27 日には日本の船に誘導され東京湾内を巡航し、後になってわかったのですが、最初に機雷などを掃海する専門部隊であり、海兵隊のなかの特殊部隊だそうです。この特殊部隊は 27 日に一度巡回して、28 日に来たと言われ、同日海兵隊も上陸しています。28 日にはさらに爆破部隊が来たようで、砲台などを爆破することを 28 日から始めて 29、30、31 日の 4 日間には完全に砲台を爆破したとのことですよ。

これからわかったのですが、私が関わったのは 8 月 30 日の館山終戦連絡事務所であったのです。木村屋旅館には外務省から 27 日に来て、その日に館山を窓口とする命令が下り、28 日には署名し、書類上 30 日から行動を開始しています。そして、31 日に先遣部隊が来てから、その対応をする指示があったようですが、もう 28 日から特殊部隊が動いている事実があり、途中で命令がどこからか来て、30 日に先遣部隊というよりも、すでに特殊部隊が活動する、急遽の命令があったということでしょうか。

そして、30 日には正式に館山終戦連絡事務所が立ち上がり、さあ、30 日に上陸してくるとなり、「とんでもない」ということで、今度は慌てて館山市民には「米兵が上陸してくるから一切戸締りをして、外に出ないように」という命令が出ました。30 日にちょうど我が家は、先ほどいった倉本部隊の隊長が宿にしていた関係で、私は学校に行っており、我が家が疎開と間引きを受けて、私は「もういいや」という思いを持っていました。

今度は館山の終戦連絡事務所と上陸地との中間控所として、我が家を貸し出したのです。主要

なる人たちは、航空隊の岸壁へ行きました。この岸壁というのは、ちょうど館山の魚市場のすぐ右側のところに、クレーンがあって、先遣隊はここに上陸するというのです。

そして、30日に急遽、我が家を貸してほしいといわれ、終戦連絡事務所の関係者は、現場に何人も行けませんから、残った人たちが我が家で待機するとなったのです。何かあった場合には連絡の中継地となり、関係者が駐屯したわけです。30日の朝、その時は私がいたのですが、急遽、連絡事務所の関係者5、6名が航空隊にいったようです。その日、残った4、5名の人たちは、我が家からそおっと海岸の様子を見ていました。一般市民の家は全部戸を閉め切って、見ることはできませんが、我が家からは上陸してくる場所が丸々見え、今よりはもっと見晴しは利いていました。

そして、海岸から上陸してきた占領軍の先遣部隊は、30日13時半と報告されています。私は13時半よりは前に、緑色のショートパンツをはいて、腰に拳銃を付けてして上陸してきた兵士たちがいたのです。この姿に「ええー」と、皆で驚いたのです。米兵というのは、あんな格好しているのか。何人かはこういう格好で、よく調べてみたところ、専門部隊の兵士たちには、裸の人間がいたのです。これは特殊部隊のなかでも機雷などの危険物を調査して破壊する部隊員だったのです。まず上陸して最初に見た兵士たちは、荒くれどもで、雇われ人のように裸でパンツ姿のうえ拳銃を持っていたのです。初めて日本に来たのに裸で来たとはビックリしたことでした。



愛沢：30日って書いてありますね。

高橋：この人たちは30日と書いています。ここはクレーンもあり、今倉庫があるところですが、この海岸に船を着け、上がって来たのを家から見えていました。人数は多くはなかったのもので、まずは姿が「野蛮だなあ」と一同が思いました。「何であんな裸な人間がいるのか」と思ったのです。その後、職能的にそういう仕事をする人たちの部隊があったのです。彼らをカエルとかワニとかいう名前をつけた文章があり、「こうい

う人たちは、潜ったりする仕事なので、カエルやワニという名前を付けている」という気がしてきました。そういう人たちに金を払って雇うことがあると書いてありました。ですから雇われの荒くれ者で、死ぬのも覚悟で危険物を取り扱う者たちであったので、あのような格好でいるとわかりました。

それで30日の午後1時半には、横須賀から将校5名と兵士111名が船で来て上陸してきたといいます。実際に折衝すると館山航空隊のエリアはとても問題があって、自分たちの人数だけで全部調べきれないということで、応援部隊を入れたようです。他の部分も含めて31日には200何名を急遽、投入したようです。そうすると海兵隊も初めの100何人ではなく、31日にも新たに兵士を上陸させ航空隊の中を調べています。

専門的な部隊が、折衝の窓口の日本人たちと一緒にやっても終わらず、とくに弾薬があった場所などの調査まで手が回らなかった可能性があります。軍人も入って、終戦連絡事務所の人たちと折衝しています。米軍は司令が1人いれば良いと言ったとされるが、1人では全部のことを聞くこともできないし、3日までの本隊上陸まで間に合わなかったと考えられます。まだ、米軍のジープは上陸していませんが、館山航空隊だけではなく、館山市内の必要なところは廻っていたようで、日本の自動車やトラックを使って巡回したと思われます。

私は我が家で待機していた終戦連絡事務所の人たちが「航空隊の車使ったらあ」と言ったことを記憶しています。30日には館山航空隊内を駆け廻ってすべて調査して、とにかく本隊の上陸に備えたと思います。

これは今の高ノ島神社にあるところの弁天様です。米軍は神風神社といっていますが、弁天様が北下台に疎開していました。この後、ここに館山航空隊の航空神社を祀ったということです。弁天様は一度、上須賀の巖島神社の脇へと移動して、戦後もう一度そこへと移して、今は巖島神社の弁天様の神社で年に一回の法要をやっています。このような建物は全部、神社だと思ったのでしょうか。

池田恵美子（NPOフォーラム事務局長）：この手水には戦闘機のマークが彫られていますね。

高橋：戦闘機、はい。

愛沢：高ノ島に航空神社がつくられた資料が出てきました。神社を設置したことは、今まで知られなかった事実です。

高橋：ミズーリ号の降伏調印式の翌日、館山には本隊が上陸してきますが、私が30日に見ました先遣部隊については、間違いなく証明できたと思

っています。館山へ第一歩を踏み込んだ先遣部隊はまず海兵隊員で、しかも最初は機雷などの爆薬物処理する特殊部隊の兵士で、その後3、4隻で来た要員たちが、本隊の上陸地となる館山航空隊全体を調査にきました。

そして、9月3日には本隊の第8軍 112 騎兵連隊が上陸してくるわけです。この日には堂々と隊列を組んで、いわゆる揚陸強襲艦から上陸用舟艇に乗り込んで、沖の方から一列に並んで来ます。そして、館山航空隊水上班滑走台に上がって来たということです。一斉にバツと滑走台へ向けて上陸用舟艇6隻ぐらいでダーッと来て、秩序正しく、綺麗に降りて来ました。そこまで見たわけです。これは米占領軍が上陸した時の様子を撮ったものですね。



愛沢：基本的にこの写真をガイドブックに使っています。これが本隊。これまで先遣隊と本隊との関係が、ちょっと漠然としていました。高橋先生もはっきり見た機雷などの掃海の特殊部隊からはじまった先遣隊は30日でした。米軍の写真資料からも事実でした。短パンの兵士の写真はないが、いろいろな証言があった中で、それは短パンの兵士たちは富津や館山に来たことは間違いない事実でした。それと本隊が3日に上陸しますが、第112騎兵連隊戦闘団がきちんと隊列をなして、整然とした上陸しています、それまでの短パン姿の兵士たちとはちょっと違ったのです。

最近、入手した総括指揮官のカニンガム報告書によると、日本側関係者は館山湾に停泊していた旗艦ラバカにおいて、カニンガムから「館山湾地区ノ占領」のための6項目の指令を手渡されているということです。上陸の際には、日本人カメラマンのほか、館山終戦連絡事務所の関係者も写っています。この写真がアメリカ公文書



館にあるオリジナル版（本紙表紙）です。

高橋：規律正しいような形で上陸し、ここからどうということかと、さっき言いましたようにすぐに疎開がはじまって、米占領軍が入るので占領地内にいる者は出ていけとなる。今度は何が起こったかということ、我が家のところからは、いわゆるカニンガムの「館山湾地区ノ占領」のための6項目の指令、つまり上陸部隊による軍政参謀課が館山市内へ「直接軍政」をおこなったとなつたのです。

カニンガムの6項目の指令は、9時半頃に発令されるわけですね。それで、4日間にわたって「直接軍政」という占領政策がとられたのです。占領がはじまったから、「さあ、大変だ」初めて日本の地を占領したのだから、星条旗が使われ、その前からもう出ているのですが。初めの時は、白旗が出されたともいいますが、星条旗が堂々と掲げられ館山は占領地になったのです。我が家の脇の道は、洲崎航空隊と館山航空隊を死角にしたようなところで、赤山から館山航空隊の方が全部、占領地になりましたから。我が家からはもう向こうへは通れないわけで、何が行われたかっていうと、まず鉄条網が張られました。それから家の前に歩哨が入るような建物がつくられ、真ん中には機関砲がこちらを向いている。

まず「4日間」は市内が完全に閉鎖され占領地となつたのです。結局、夕方7時から朝6時まで外出禁止という命令も下ります。

愛沢：これですね。



高橋：これは、3日からこのようにしなさいとなつたわけですね。

愛沢：軍政参謀課を設置することが「直接軍政」という事実になります。学校の閉鎖という命令があつたのです。

高橋：学校の閉鎖ということが、安房中学校の教務日誌に書いてあります。残念ながら、他に米軍上陸を示した記録などは見たことがありません。

佐藤：学校はいつ再開されたのですか。



愛沢：7日です。

高橋：学校再開が7日となっても、通知がなかなか出来なかった。他の学校の日誌を見ると、2日に先遣部隊が高等女学校に視察にいらいます。2日までには、日本の自動車を使用して巡回し必要なところを全部偵察していたのです。

なぜ安房高女に行ったか、安房高女は軍需工場であったり、館山病院指導の看護部隊に関わっていたり、学校自身が野戦病院的存在があったらしいとの情報を持っていたと思います。

館山病院は、上陸するとすぐ交渉が始まっています。病院関係ですから医師の川名正義先生の手記の中にも、そんなことが書かれています。米占領軍は必要なところの情報は相当握っていたことがわかります。

家のそばで、4日間であっても「おっかないかな」と感じていたのですが、そうでなかったのが安堵しました。占領ですから、衛兵は戦闘服のままであったが、そういう連中でもフレンドリーな感じがしました。向こうから「グッドモーニング」と声かけてきました。

普通、衛兵が一般人に声をかけますか。そういう具合ですから、こっちも「おはよう」とぐらいいは、相手したのを覚えています。声をかけられたということは、大変なことで日本だと絶対禁止ですね。米兵は占領していても軍規を守っていれば、話しかけも問題がなかったのですね。初めのうちは2、3人が衛兵として歩哨に立っていましたが、「直接軍政」が解除になって、2か月ぐらい衛兵が1人になって順番にやっていました。

また、最初は市内の通行は全部止められていたので、西岬まで行くのに困っていました。また、館山病院では患者が来られないので困ると申し入れをしたようです。西岬までは一部許可証を出して通過できるようになりました。私も途中で最初に通る時に、ちょっとMPに捕まったりしたこともありました。

愛沢：結構、整然としていたように見えます。

高橋：上陸して2日後、上陸して木更津へと汽車で

移動していきます。

愛沢：この時の様子は他のところの場面にも出てきます。

高橋：こういうところでは、米軍は館山市民から日本人というものを観察したのでないでしょうか。アメリカ人が思っていたような「神風的な感じ」ではなかったということです。

これは館山病院の穂坂与明院長と川名正義副院長とですが、館山の占領軍にとって医師たちとの交流は重要でした。これは解除になってから街へと買い物に出て行った様子です。

愛沢：女性の兵士がいるところを見てください。占領には女性の役割があって、館山の「直接軍政」に関わって上陸してきたのでしょうか。



高橋：これは料亭ですが「鈴木」じゃないかな。

愛沢：制服を着ています。

高橋：それで徽章が気になっていました、上陸して来た兵士も騎兵のマークがありました。

愛沢：これですね、先ほどの。



高橋：これこれ、騎兵部隊なので。

愛沢：ヘルメットのところを見てください。

高橋：軍人の制服にはこういう肩にも貼ってある。こういうようなことを見て、「凄いな。こう皆が入っているんだなあ」と思ったものです。

終戦の時に感じた三つのお話をします。川名正義先生と穂坂与明先生と、米兵は軍医と通訳じゃないかと思います。この方が宗教大尉だったのか、館山病院の看護婦さんや事務の方々と一緒に、初めて通訳の力を借りて、10月に英会話教室を始めたので、私は11月に行きました。ただ、学校があったので夜やってもらいましたが、3回ぐらいで辞めてしまいました。聞いて話す英語がどういうものかわかりました。

私が勤めていた学校は西岬東尋常高等小学校でしたが、戦争末期には西岬国民学校となり、戦後、西岬村の東小学校になりました。勤めて最初の担任が高等科の生徒でした。



たまたま我が家の近くには、米占領軍の衛兵が、時々入れ替わっても、衛兵隊にいた一人とちょっと話しをするようになり、親しくなりました。その子たちに米兵を学校に呼んで来て良いかと聞くと「いいですよ」ということで、学校長の許可を得て私は兵士を学校に連れていったのです。学校の高等科1年の教室において、生徒を前に、その衛兵には「子どもに話しをしてほしい」といったのです。まだ19、20歳にならない新兵で、アメリカのテキサスから来たというのです。「じゃあ、出身地がテキサスだから、地図を持って来るから」といって、世界地図のなかのアメリカを出して「テキサスはどこだろうか」というとわからなかったのです。米兵は「スペルはどう書くのか」と私に聞きました。そのような若者が兵士のなかにいたということがわかりました。教育は受けていない人物でしたが、人間的にはよい若者で、彼は日本人たちと親しく交流しているという面をもっていました。

2つ目のエピソードで、我が家へと士官2名を招待しました。彼らは「日本の様子を知りたい。どのような生活をしているのだろうか」というので二人を呼んだのです。「日本の様子を見る」と片言の英語で話し、家へ上がらせました。10畳と8畳があって、8畳に入れて、床の間や違い棚を見せました。彼らは靴を脱いで部屋に入ることが滅多にないことです。それで畳を歩くってことや廊下があるということ、それから障子があるってということ。また畳のところに卓があって、そこに座布団を出すのだが、「どうでも良いから、どうぞ」といっても座り方がわからない。お袋がお茶とお菓子を出して接待しました。アメリカ人たちは日本の家の造りである畳や天井、違い棚、床の間、そして欄間などに興味を示しました。飲み物は緑茶、お菓子はかき餅だったと思う。英語を片言で話ながら「一番お土産として何が欲しい物は」と聞いたら、鎌倉彫などの彫り物や器、それから瀬戸物やお茶碗でした。1日だけ交流でしたが、手振り身振りの話の中で文化的なレベルの高さを感じ取ることができました。

愛沢：『北条小学校100年史』のなかに、高橋先生に関わる一文がありました。

高橋：この女性の先生は最初の西岬東小学校で、一緒に学校に通学していました。まだ占領されているなかで、米軍兵士のなかを通過するのに許可証が必要でした。家の前だけでなく、途中「洲ノ空」や大賀のところに衛兵がいた時期でした。

「館山に上陸した米海軍人がMPと書いたヘルメットを被り、自動小銃を肩にして、洲空前の路上警備をしていた。当時、西岬東小学校勤務の私はどうしてもその前を通らなければならなかった。同校勤務の高橋博夫先生と自転車で出かけた。初めて見る外国人、敗戦直後の事なので息詰まる思いで近づくと、さっそく寄ってきた兵に何やら問われ、高橋先生のジェスチャーと片言で、この先の小学校の教員であることが通じたらしく、通行が許可された。あの時の恐怖と安堵と、深呼吸は今も忘れられない」

海兵隊の兵士たちの一部は、住民に大きな迷惑をかけました。ですから、多分、通知が出されたと思います。使節団の河辺虎四郎団長が、マニラの司令部に行った時に、日本人と「接触する時はぜひこれを守って下さい」という文章を届け、それをマッカーサーは読んだといわれます。



1945年9月3日に館山に上陸した米占領軍本隊112騎兵連隊の兵士たちは、非常に紳士で、トラブルはありませんでした。館山市民も親しくなり、9月中旬には街なかに米兵向けのお土産も開かれました。

戦争のなかで教師になり、占領地を通りながら戦後の教育に携わって、今日まで70年が経ちました。

